

1. はじめに

先月は体育祭や水高祭があり、忙しかったですね。私はどちらも初めてでしたが、大変盛り上がった充実感のある行事でした。生徒の皆さんが準備の段階から一生懸命に取り組む姿に感心しました。また、普段の授業の様子とは違う一面が見られ、頼もしく思いました。地域の方もたくさん来校されており、本校は地域に密着した学校だと改めて感じ、より地元の皆さんに愛され、応援されるようでありたいと強く思いました。

地域の方は生徒の皆さんのことを本当によく見ておられます。道路の真ん中を集団で歩いていたり、自転車の二人乗りをしたりしていませんか。なぜこのようなことをしてはいけないのかをまず考えてみましょう。

2. 四つ葉のクローバって幸福？

人権・同和教育部 1年生担当 吉田康博

皆さんは「四つ葉のクローバ」と聞いてどのような思いが浮かびますか。でもクローバって三つ葉のことを言いますね。私が幼いころは、いつも当たり前のようにそこら辺にあるもの、特に松山町のあの公園に行けばすぐに見つかる葉っぱという印象でしかありません。

それでは、なぜ、その公園に行けばいつも四つ葉のクローバがあるのでしょうか。その公園の名前を聞けば納得すると思います。原爆中心地公園だったのです。

私が大学生の時「RI 利用論」という講義がありました。その中で「今でもあの公園に行けばガイガーカウンターが反応するよ。」という教授の言葉が未だに耳に残っています。私が知る限り、幾度となくその公園は造成され続けました。今の公園は昔の面影は一つもなく、もちろんクローバに代わって芝になっています。

さて、日本国内には原子力の平和利用として原子力発

電所が複数あります。ここ島根県にも存在しています。原子力は人間の手で利用できるエネルギーなのか。未だに私は答えが出ません。でも福島では事故が起こり放射能による被害があることも事実です。福島で生まれ育った方は福島をどう思うのか、また、原発についての考え方はどうでしょうか。

私は長崎の地で生まれ、育ちました。長崎の地は大好きです。でも四つ葉のクローバは嫌いです。さて、皆さんは「四つ葉のクローバ」と聞いて、どう思いますか。



3. 「ことば」



今回は大変身近な「ことば」について書いてみます。私たちは「ことば」で意思疎通（コミュニケーション）をしています。ですから、「ことば」を正しく理解し、使うことができないと、非常に困ることが起こってしまいます。

最も分かりやすい例は「外国語」でしょう。私はロシア語は全くできないのですが、日本語の全く分からないロシアの人と、どのように意思疎通をすればいいのでしょうか。ある程度のことは「身振り手振り」で可能です。

(ノン・バーバル・コミュニケーション、つまり「ことば」によらない意思疎通。) 例えば、顔を真っ赤にして身を震わせ、怒鳴り散らしていれば、「この人は怒っているのだな。」と理解できます。涙を流していれば「悲しい(嬉しい?) のだな。」と分かります。では、次のことを伝えたい場合、どうしますか。「2週間後に親しい友だちと福島に行って、福島第一原発の様子を観察してレポートにまとめる、という宿題をしてくる。」

【裏へ続きます】

私なら絵を描いて伝えようとするでしょうが、相当難しいことは間違いありません。

それでは、普段、『分かり合える』『ことば』で会話をしている私たちのことを考えてみましょう。

「昨日、うちの庭に猫が来た。」と私が言ったとします。皆さんはどのような光景を思い浮かべましたか。ここでは、「猫」について考えてみます。皆さんがイメージした

「猫」と、私が見た「猫」とが一致することはあり得ません。あなたのイメージの「猫」の色や大きさはどのようなものでしたか。私が



見た「猫」のことは、私が事細かに説明しなくては「本物」のイメージには近づけないでしょう。つまり、『分かり合える』というのは、ある程度分かり合える、ということ、100%分かり合えるということはないのです。「誤解」や「すれ違い」、「勘違い」が起こってしまうのは仕方ないことかも知れません。ですから、私たちは人の話を聞く時、「この人が伝えたいことは何か。大切な情報は何か。」ということを真剣に考えないといけないし、話す時は、聞いている人が分かりやすいように言葉を選ぶ必要があるのです。そして、何よりもまず、互いに「分かり合おう」とする努力が必要です。普段の生活だけではなく、授業でも当然このことは当てはまります。

「ことば」の大切さと難しさについて書いてきましたが、次に具体的な使い方について考えてみましょう。

日本語で「私」を意味する言葉をできるだけたくさん考えてみてください。いくつ思い浮かびましたか。「俺」「僕」「あたい」「わし」「自分」「吾輩」「うち」…。K2の英語の授業でひとりずつ順番に言ってもらったら、20個程度も出て来たことがありました（K2の皆さん、覚えていますか。楽しい授業でした！…と思ったのは私だけでしょうか）。ちなみに、英語にはひとつ（I）しかありません。では、どういう場面でどの語を使うのかを考えてみましょう。会社員が上司にどの語を使うでしょうか。「ことば」には話し手の「気持ち」が含まれ、聞

き手には、その「気持ち」が伝わります。「俺は…」と言われた上司はどう思うでしょうか。例えば社員に悪意がなかったとしても、上司は確実に気分を害するでしょう。

「ことば」には『言外の意味』があります。「俺」と言う人にとって、聞き手は「お前」なのです。話し手が「そんなつもりはない」と思っていたとしても、聞き手はそう受け取るのです。そのことばを聞いていた周囲の人たちも、聞き手と同じように思うでしょう。つまり、「ことば」の持つ『言外の意味』を知っておかないと、良好なコミュニケーションは成り立たないのです。

そこで今回は、「人を傷つけることば」の一例を紹介します。「差別用語」または「不適切な表現」と呼ばれるもので、例えば悪意がなかったとしても日常使ってはいけないものです。知識として知っておかねばなりませんので、矢印の次に紹介した表現を使うようにしてください。

- ・「めくら」 → 目の不自由なひと
- ・「びっこ」 → 足の不自由なひと
- ・「かたわ」 → 障がい者
- ・「つんぼ」 → 耳が聞こえないひと
- ・「おし」 → 口がきけないひと
- ・「後進国」 → 開発途上国、発展途上国



私が懸念するのは、「ふざけて」このようなことばを使う人がいるのではないかと、ということです。また、「死ね」という発言は本当によく耳にします。目立つ所に書く人すらいます。『言外の意味』は「やめて欲しい」「冗談ではない」「嫌だ」ということだろうとは思いますが、絶対に使って欲しくない言葉です。

「ことば」で人を傷つけるのは、直接的にも間接的にもたやすいことです。私も反省せねばならないことが多くある、と改めて思いました。



（文責：古田千博）